艾儒略の職方外紀に就いて

鮎澤信太郎

目次

はしがき
一、艾儒略
二、職方外紀の由來
三、職方外紀
四、東洋地理學史上の職方外紀
結語

明末清初多くの耶蘇會士が支那に來て耶蘇教を弘布する手段として泰西の諸科學を紹介したことは有名な事實である。

こゝに注意する艾儒略も亦その一人として殊に重要な人物であり、その漢譯した職方外紀は當時の東洋に初めて紹介された世界地理書として貴重なものであり、且つ支那及び日本の地理家の間に永く用ゐられてその地理學史上に及ぼした影響は決して少くはない。

乃ち以下東洋地理學史の一部として艾氏の略歷及びその著す職方外紀に就いて記して見度い。

一

ヂュリオ・アレニ(Aléni, Jules)を漢字名になほして艾儒略(Ai Ju liao)と云ふ。彼は西紀一五八二

年伊太利の北部ブレシア(Brecia)に生れ、十八歳の時に耶蘇會へ入つた。そして丁度北京で利瑪竇が他界した一六一〇年(萬曆三十八年)に支那へ到着した。(一)

澳門に來着した艾氏は此處で數學の教師を勤め、後上海・揚州等を巡遊し、更に陝西及び山西に布教し、一六二〇年には杭州に轉じ常熟に移り、數週間の中に二百二十人に洗禮を施した。

一六二三年(天啓三年)には熹宗の命により銃炮製造の爲に僚友畢方濟(Franciscus Sambiaso)と共に北京へ迎えられた。(二)この年八月にこゝに注意する職方外紀が執筆されてゐる。

其後一六二五年に福州に到り、非常な成功を收めたが偶々他派の者の不謹愼に依つて引起された事件に連累を被り、一六三八年には同僚宣教師等と共に澳門に流され多くの耶蘇教徒等は迫害され、その教會は異教徒に沒收される所となつた。けれども又其の翌年(一六三九年)には復活して福州に歸へることが出來た。以後彼は一六四一年から一六四八年まで南支那教區の副監督を勤め、一六四九年八月三日六十八歳を以て異鄕の空に他界した。(三)

かくして在支三十九年間、彼は先輩利瑪竇の人格を慕い、その布教の手段を學び、漢文を能くし職方外紀其他漢文による多くの著述を遺した。(四)

(一) 艾氏が來支した年に就しては Henri Cordier の "L' Imprimerie Sino-Européenne en Chine" に據つて一六一三年とするものがあるが、艾氏は自ら「儒略始偕二三友朋如畢子今梁諱方濟史子建修諱百庚等。浮海遠來。而利子是年歿矣。然雖不及一面。」(艾儒略著「大西西泰利先生行蹟」)と云ひ、利瑪竇の歿年は一六一〇年であるから一六一〇年が正しい。

(二) 「天啓三年。艾儒略畢方濟俱意大利國人奉召至京聽用。」(正教奉褒十四)とあり。

(三) 此の項は多く Couling: The Encyclopaedia Sinica P.11 に據る。

（四）艾儒略の漢文著述には、天主降生言行紀略、天主降生引義一卷、彌撒祭獻二卷、滌罪正規四卷、萬物眞原一卷、三山論學記一卷、西學凡一卷、性靈篇一卷、性學稱述、職方外紀五卷、西方答問、幾何要法四卷、景教碑頌註解、聖體禱文、出像經解一卷、利瑪竇行略一卷、楊淇園行略一卷、熙朝崇正集四卷、張彌克遺蹟一卷、悔罪要旨一卷、五十言餘一卷、聖教四字經文一卷、口鐸日抄、坤輿圖說、道原精華四卷等がある。（徐宗德著「明末清初滙輸西學之偉人」六十七・六十八頁參照）

二

職方外紀は同書に載せた葉向高の序の終りに「此書刻于閩中閩人多有索者故艾君重梓之余爲書其端如此」とある所から見ると、我々が今見る天啓三年開版のものより以前に浙江方面で刻されたものかと想はれる。(一)けれども天啓三年本の艾氏自序にはそれに就いて一言もされてゐないのでこゝでは閩中にて刻したものに就いては別に論及することが出來ない。

天啓三年に出版された職方外紀の由來に就いて四庫全書總目提要には「自序謂利氏齎進萬國圖志龐氏奉命翻譯儒略更增補以成之蓋因利瑪竇龐廸我舊本潤色之不盡儒略自作也」とあり、即ち利瑪竇が一六〇一年北京へ入つた時獻じた萬國圖誌を龐廸我が命を奉じて翻譯し、之を更に艾氏が增補して職方外紀が出來たことになつてゐるが、此の說は職方外紀の艾氏自序や外紀に附錄された龐廸我の奏疏・李之藻の序文等に據ると恐らくは間違ひであるらしい。

外紀に載せた李之藻の序文に大略次のやうなことが記るされてゐる。

即ち李之藻が「萬曆辛丑に北京に來た利瑪竇の居を訪ねるとその壁間に大地全圖が掛つてゐた。之に就いて利氏が解說をしてくれたが中國人の及ばざる所が多く且つその理論は正確であるので遂

に此の地圖を譯して萬國圖屏風とした。其後久しく經つてから之を天子(萬曆帝)に見せた者があつて、天子は更に此の印刷を要求した。然し其時は既にその版木が南方へ持ち去られてゐたので人々は翻刻して求めに應じた。[二二]

會々又閩の役人が洋船から得た歐羅巴文字の地圖二幅を獻じた。此時利瑪竇は既に世を去つてゐたので丁度北京に居合せた龐廸我と熊三拔の二友が命を奉じて翻譯し、之に奏言を附して獻じた。」と、この奏言が職方外紀に附錄された奏疏計二本であらう。

此時の事情に就いては龐廸我の奏疏に大略次の樣なことが記るされてゐる。

「萬曆四十年(一六一二年)九月二日に看時刻近侍龐成等が世界地圖二扇を持參した。余(龐廸我)は同伴の熊三拔と共にこの地圖を看ると之は大西洋で刻する所の萬國全圖の原版で元四扇の中の二扇である。從つて完本ではない。若し欽命を蒙むるなら缺を補つて完本となし、悉く中國文字に譯して御覽の便に供し度い。又尙詳しくは萬國圖誌一冊がある。其書は先年我等が獻上して置いたものである。但し此れも亦皆西國文字で覽るに不便である。

若し命を得るなら此れも原書の發下を請ふて中國文字に譯して聖覽に供したい。」とあり。

此の第一の奏疏が初め提出され、更に第二の奏疏には「同月五日に龐成等は御茶房牌子魏學顏に御前から請出して貰つた原屏風二扇を持つて來て翻譯を依賴した。乃ち我等は此圖に缺くる中國圖及西南方國圖二扇を補ひ中國文字に翻譯し、共に四扇となした。而して圖中の書寫の明瞭を缺くのを恐れて各國の政敎風俗土產之類に關する記事を別に一篇となして御覽に便する。

こゝに謹んで四軸を作り、發下された原屏風二扇と併せて上進する。然し此れだけでは未だ萬國の情勢を通察するには完璧を期し難い。その爲には則ち先年貢献した萬國圖誌一冊がある。此の書の記述する所は至詳至備、此際翻譯して一書を爲り度いが我等に今、別に副本が無い。倘ほ聖意、詳備をのぞまれるなら先年貢献の原書の發下を願ひ度い。

次にこゝに我等の製造した象牙の時刻晷二具がある。皇上の日常生活の一助ともしたい。

乃ち今、原屏風二扇に併せて新譯圖說四軸時刻晷二具を謹呈する。」と云ふ意味のことが記るされてゐる。

此等の記事によると此時四庫總目提要の云ふ如く利瑪竇の齎進した萬國圖誌一冊は未だ龐廸我等に翻譯されてはゐない。翻譯されたのは李之藻の謂ふ閩の役人が洋船から得た萬國地海全圖に外ならない。實際職方外紀の艾氏自序にも「吾友利氏齎進萬國圖誌已而吾友龐氏又奉繙譯西刻地圖之命據所聞見譯爲圖說以献都人士多樂道之者但未經刻本以傳—中略—誠不忍其久而煙滅也偶蠹簡得覩所遺舊稾乃更竊取西來所攜手輯方域梗概爲增補以成一編名職方外紀」とあつて別に萬國圖誌を翻譯したとはなつてゐない。

即ち艾氏の著す職方外紀は龐廸我・熊三拔等が萬曆四十年に翻譯した西刻の萬國地海全圖の舊稿を艾氏が得て其の煙滅を惜み更に西來の地理書や自らの聞見により增補して一編としたものである。

猶此書の編纂にあたつて洪園楊仲堅があづかつて居り、而して中國附近の地理を載せずもと中國

と通ぜざる所を記したので職方外紀と名づけたことが李之藻の序文にも艾氏の自序にも見えてゐる。

次に我々は職方外紀の原本即ち龐廸我等が翻譯した萬國地海全圖に就て考へて見る必要があるのだが、現在の筆者の管見を以てしては次の如き事實を擧げて識者の御示教を仰ぐに餘儀無いのである。

第一に職方外紀に載せた萬國全圖は利瑪竇の坤輿萬國全圖と同一形式のもので、亞細亞洲を中央にした楕圓形圖であつて、全く利氏世界圖とよく似てゐる。而も別に第五卷には利氏世界圖の欄外に記載されたものと同樣の南北半球圖や日月蝕圖がある。然し必ずしも利氏世界圖と全然一致するものではなくその南方大洲墨瓦蠟泥加の如きは利氏世界圖のそれと異つて一五七一年のオルテリウスの世界圖と殆ど等しい。又、各洲分圖の方には船舶・怪獸等の繪畫もある。

第二に其の內容は利瑪竇の坤輿萬國全圖のものと異り、後の南懷仁 (Verbiest, Ferdinand) の坤輿全圖の註記及び坤輿外紀の文章と大體同文である。南懷仁には右の外に坤輿圖說二卷の著があるが、今、筆者はこれを見ることが出來ない。然し坤輿外紀は坤輿圖說の抄本であり、又四庫總目やワイリの漢籍解題 (Wylie, Alexander; Notes on Chinese Literature P.58,59) の坤輿圖說の解說等に依れば之も亦艾氏の職方外紀と殆ど同一の文章であることが推察される。從つて南懷仁の諸書が艾氏の職方外紀から出たものでなく、他の原本から譯出されたものとすれば職方外紀と右に擧げた南懷仁の諸書の原本は同一のものと見られるかと思ふ。

（一）輔仁大學叢書第一種、中西交通史料滙篇の艾氏略傳にも「明萬曆四十一年ノ癸丑ノ至。先入都門。徐文定公迎歸上海ノ轉行浙江ノ宏宣聖教。葉相國福唐復迎入閩。閩中稱爲西來孔子。」（第二冊四三一頁）云々とある所から見ても浙江方面で艾氏は相當活動したものと見える。

（二）「萬曆辛丑、利氏來賓、余從寮友數輩訪之、其壁間懸有大地全圖、―中略―余依法測驗、良然、廼悟唐人畫方分里其術尙疎、遂爲譯以華文、刻爲萬國圖屏風、居久之、有瀆呈御覽者、旋奉宣索、因其版已拋而南、中貴人、翻刻以應、」（李之藻逃職方外紀序）とあり、利瑪竇が故鄉へ報じた手記にも見えてゐることが英國のバッドレー氏によつて注意されたが、之は利氏世界圖刊行の次第を研究するに重要な資料であると思ふ。（The Geographical Journal Oct. 1917. P.207 參照）

（三）南懷仁の坤輿圖說二卷の抄本である坤輿外紀の文章を坤輿全圖の註記と比較して見ると、坤輿外紀の文の方が全文であつて、坤輿全圖の方は途中を省略した所がある。從て、南懷仁の坤輿圖說は利瑪竇の坤輿萬國全圖の註記を摘出して坤輿全圖說とした關係と異つて、地圖と圖說は別々に原本から譯出されたものである。

三

この章では守山閣叢書史部に入れられたものを更に皇朝藩屬輿地叢書の採る所の職方外紀に據る。我國に傳はる職方外紀の寫本には大抵艾氏の友人であつた葉向高・李之藻・楊廷筠・瞿式穀・許胥臣等の序文と艾氏の自序並に奏疏計二本が卷頭についてゐる。今據る所のものは叢書に入つてゐる爲に艾氏の自序と四庫全書提要の職方外紀解題を載せて他は全く省略してゐる。

本書は五卷[一]からなり、最初に職方外紀首として五大洲總圖界度解と云ふのがあり、次に萬國全圖と亞細亞洲圖とがある。

其の次が卷一となつて亞細亞總說があり、續いて韃靼・渤泥・呂宋・馬路古・地中海諸島・印弟亞・莫臥爾・百爾西亞・度爾格・如德亞（古名拂菻又名大秦唐貞觀中曾以經像來賓有景教流行碑刻可攷）・則意蘭（以下皆海島）・蘇門答剌（一云須文

達那・瓜哇の順に記述し、更に又渤泥・呂宋・馬路古・地中海諸島の記事が出てゐるが之は全く同一の文句であるから印刷の間違ひであらう。以上で卷一を終り卷二は又卷一と同じく卷頭に萬國全圖の歐羅巴だけを稍々擴大した地圖を附し、歐羅巴總說を書き出しとしてゐる。之は相當に詳しいもので歐羅巴の風俗習慣・宗教・法制・物產等々に亘つて述べられてゐる。各說に於いては以西把尼亞・拂郎察・意大理亞・亞勒瑪尼亞・法蘭得斯・波羅尼亞・翁加里・大泥亞諸國・厄勒祭亞・地中海諸島・西北海諸島の項目を設けて卷二を終り、卷三の利未亞（アフリカ）にうつるのであるが以下卷一・二の體裁に從つて利未亞地圖・利未亞總說・阨入多・馬邏可・弗沙・亞非利加・奴米弟亞・亞毘心域・馬拿莫大巴・西爾得・工鄂・井巴・福島・聖多默島・意勒納島・聖老楞佐島の順に記し、卷四は亞墨利加地圖・亞墨利加總說、次に南亞墨利加と北亞墨利加に分けて、前者の中に孛露・伯西爾・智加・金加西蠟・後者の中に墨是可・花地・新拂郎察・拔革老・農地・寄未蠟・新亞比俺・加里伏爾泥亞・西北諸蠻方・亞墨利加諸島の記述がある。そしてこの卷四には卷末に墨瓦蠟尼加總說が附隨し、この記述の終りに「其人物風土山川畜產與夫鳥獸蟲魚俱無傳說即南極度數道里遠幾何皆推步未周不漫述後或有詳之者」とある通り、墨瓦蠟尼加に就いては總說以外には地圖も各地の記述も全くない。

卷五は最初に晝夜平線を以て地球を南北に分つた北輿地圖・南輿地圖を描き兩圖の間に月蝕圖と日蝕圖がある。次に四海總說・海名・海島・海族・海產・海狀・海舶・海道の項目がある。

四海總說に於いては四行（火氣水土）の組織形狀に依つて水陸の別があり、その中水の形狀に依

つて又、谷・川・湖・海の別あることを述べ、海名の項に於いては卷頭の萬國全圖中に見られる海名が列擧されて居り、海島の項には日本も初めてその名を現はし、石礁等に至るまで記るされ、海族の項に於いては魚類に就いて記し、海產の項には眞珠・珊瑚・琥珀・鹽塊等に就いて記し、海狀の項に於いて海の深淺・波の高低・季節風のこと、潮流のこと等を記し、海舶の條にては航路に就いて述べてゐる。

全體を通じて注意されることはやはり著者の社會的立場からして當然のことであらうが天主教に就いて相當詳しく論述されてゐることである。

中國人のまだ知らない遠方の珍奇な風俗習慣・土產等に就いて述べ、之に興味を感じて讀む人々に自ら天主教を宣傳する用意を怠らなかつた所にこの書の特徵がある。

職方外紀は利氏世界圖と異つて名稱の物語る如く支那及びその朝貢の諸國、日本等は述べてゐない。且つ記述が利氏世界圖より詳細になつてゐるので地圖の中には註記がない。

地圖と說明が分離したことや又天文學・宇宙論等の記述を除いて純地誌としての體裁を整へたことは利氏世界圖から地理書として長足の進步をなしたものと云へる。

（一）鐵研齋輶軒書目（文明源流叢書第三）には「職方外記六卷」とあり、帝國圖書館所藏の職方外紀寫本は卷之四の末尾に加へられた靈瓦蠟泥加が卷五となつてゐる。從つて六卷となるのである。今、艾氏が天啓三年に出版した時五卷になつてゐたか、又は六卷になつてゐたか原本を得ることが出來ない限り知ることが出來ない。私は守山閣叢書に信賴してこゝには五卷本に據つたのである。これは然しいづれにしても內容に違ひはないのであるから大した問題ではない。

四

明史卷三二六列傳二百一十四の意大里亞の條に歐羅巴のことを述べて「其所言風俗物產多夸且有職方外紀諸書在不具述」とあるによつて支那人にこの職方外紀が如何に外國のことを知る爲の參考書として重要なものであつたかを知ることが出來る。

支那では利瑪竇の作つた世界圖やこの職方外紀に依つて地球の概形を敎へられ、淸朝になつてからも久しく唯一の世界地理書として參考せられた。

齋藤正謙がその鐵硏齋輶軒書目に(一)「明人得職方外記、始知有五界萬國、其說猶屬草創、其後二百餘年以至今日、淸人說五界猶據外記」云々(山村昌永輯西洋雜記解說)と述べたのは事實であり、職方外記が近世支那世界地理學史上に如何に重要な位置を占めるものであるかを物語つたものである。

我國に於いては寬永七年午年の禁書の中に此の職方外紀も加へられ其後は公には讀むことを禁ぜられた。然し、職方外紀は全部ではないが、やがて寶永五年(一七〇八)に至つて漢文から日本文に姿を變へて禁を逃れ、我國世界地理學史上に確固たる地盤を築く。即ち、長崎・西川求林齋の增補華夷通商考の中、卷之五がそれである。西川如見の華夷通商考は始め元祿八年(一六九五)に刊行されたが、之は增補華夷通商考の作例に「前書二冊誰人ノ梓ニ命ゼシ事ヲ不知、予艸稿ニシテ他ノ爲ニ所添削還テ差謬多ク、又轉寫魚魯ノ誤不少、今書林ノ求ニ依テ、予ガ定本ヲ出シテ是ヲ改正シ、其不足處ヲ增益シ、且加フルニ圖畫ヲ以ス、都テ五冊、最前書ニ勝レル事遙ナリ」とあるに依つて

見ると其の刊行に就いては著者西川如見の關知せざる所であつたことになつてゐる。が如見は恐らく前の二冊本の刊行も自ら爲したものかと思はれる。即ち彼は其後職方外紀をひそかに手に入れ、之を閲するに既に自分の出した華夷通商考二冊本が此書に比して餘りに不備なので之を僞作に事よせ、新に得た職方外紀を翻譯して前本を增補したものであらう。

前本に增補した所は殆ど職方外紀の翻譯に盡きてゐる所から見てもいよ〳〵さう考へられる。然し當時職方外紀は勿論禁書の一つである。從つて如見は職方外紀に就て一言もしてゐない。併も職方外紀の文章を所に依つて前後させたり、幾分補つたりして、禁を犯してゐることに氣付れないやうに細工を施してゐる。(二)

西川如見の華夷通商考は新井白石の西洋紀聞や采覽異言よりも早く刊行され我國の世界地理書の類としては嚆矢とされるものであり、又相當に廣く讀まれ、後々まで斯の方面に多くの影響を及ぼしてゐる。此の書の所謂新知識とは實に艾儒略の職方外紀の記事に他ならない。(三)

かくして、改めて職方外紀輸入の禁を解くまでもないのであるが、世の進運に伴ひ世界の情勢を知る必要も生じたのであらう。享保十六丑年には此書の輸入が許された。(四)其後に至つては齋藤正謙が前掲書中に艾儒略增譯の職方外紀と南懷仁の著す坤輿外紀一卷を解說して「右二部明末所撰、明淸人說五大洲、本據此書、世多有之、故不須余縷述」と述べてゐる如く此書は世に多くあつて世人周知のもの故正謙をして別に詳述の必要を認めさせなかつた程である。又山村昌永もその增譯采覽異言の參考書目漢書の部に職方外紀を擧げ、(五)同書中にも外紀の說を引用增譯する所が多く、又更

に近くは幕末の志士渡邊華山の愼機論の中にも「波羅泥亞は、職方外紀・坤輿圖說諸書に見えたる國にて」（大日本思想全集一三ノ三三〇頁）云々などゝあるのを見ても亦現在多くの寫本が散在してゐる所から推しても江戸時代我國に弘く流布したものであることが分る。と同時に當時の地理家に及ぼした影響も直接・間接に甚大なるものゝあることを想ふことが出來やう。

（一）國書刊行會版「文明源流叢書第三」に入れられたものに據る。

（二）一例を擧げれば、

「小人國、ホトリヤ國ノ北ノ海濱ニアリト云、人ノ高二尺許リ、鬚眉曾テ無ク、男女見分ガタシ、土地鹿多シ、人皆鹿ニ乘テ行、或ハ鶴ノ如キノ鳥其人ヲ食事アリ、故ニ小人常ニ此鳥ト相戰フ、若偶山野ニテ此鳥ノ卵ヲ見レバ、即破レ之テ其種類ヲ絕サントスト云」（增補華夷通商考卷五）

「又聞北海濱有小人國高不二尺鬚眉絕無男女無辨跨鹿而行鶴鳥常之小人恒與鶴相戰或預破其卵又以絕種類」云々（職方外紀卷二）

「又大魚身ノ長二三十丈、頭ニ大ナル穴二ツアリ、此穴ヨリ水ヲ吐出スニ河ノ如ク强シ、大洋ヲ渡ル大船ニ遇トキハ、則其首ヲ揚テ水ヲ船中ニ吐入、暫時ニ水滿テ船沈沒ス、此故ニ船此魚ニ遇フトキハ、酒ヲ檀ニ入テ海中ニ投入レバ是ヲ呑テ去レリ、偶淺キ處ニ漂ヒ到ル事有トキ、人是ヲ殺シテ油ヲ煎ズルト云」（增補華夷通商考卷五）

「魚之族一名把勒亞身長數十丈首有二大孔噴水土田勢若懸河每遇海舶則昂首注水舶中傾刻水滿舶沈遇之者亟以盛酒鉅木罍投之連呑數罍則俯首而逝淺處得之熬油可數千斤」云々（職方外紀卷五）

（三）藤田元春先生は然し華夷通商考に就て「その記する所は主として利瑪竇の圖說に從ふ所が多い。」（藤田先生著日本地理學史三二四頁）とされてゐるが、之は「主として艾儒略の職方外紀に從つたもの」と訂正さるべきかと思はれる。

（四）職方外記享保十六丑年唐船持渡候皇明職方地圖之內に有レ之商賣被ニ仰付一候（近藤正齋全集第三・二百十八頁）とある。

（五）山村昌永は但し、職方外紀とは記さず、私の見る所のものはいづれも艾氏、萬國圖說と記してゐる。然し其の內容は職方外紀と少しも異つてゐない。

以上で職方外紀の調査を終るが、此の書は我國でも江戸時代の地理學史の諸問題が扱はれる際に

その名はしばしば見えてゐるのであるが未だ取り立てゝ述べられたものは無い。

しかも筆者の淺學菲才は一層論述を蕪雜なものに終らしめた。

殊に外紀の原本（最初の）萬國地圖に就ては其を推考する爲に何等かの手がゝりになるかと思はれる一・二の事實を擧げたに過ぎない。

又、外紀の支那地理學史上に及ぼせる影響に就ては資料を得ることの困難なるに依つて詳論することの出來なかつたのは殘念である。

たゞ從來その由來に就て四庫總目提要の云ふ所が行はれてゐたが、それは誤りであることが明かに出來たことゝ我國世界地理書の嚆矢たる西川如見の增補華夷通商考の新知識とされる卷五が職方外紀の翻譯であることを明かに出來たことは僅かにこの調査の收穫であると思ふ。

（一九三五・三・二〇）